

分担研究年度終了報告書

1. チーム医療推進分担研究班

分担研究者 氏名 佐々木 均・長崎大学病院 教授・薬剤部長

A. 研究目的

チーム医療とは「多種多様な医療スタッフが、各々の高い専門性を前提とし、目的と情報を共有し、業務を分担するとともに互いに連携・補完し合い、患者の状況に的確に対応した医療を提供すること」（平成22年4月30日付厚生労働省医政局長通知、前文）と定義され、質の高い医療の実現と、快適な職場環境の形成や効率的な業務運営に結びつく取り組みに期待が寄せられている。日本病院薬剤師会によるチーム医療や地域医療の先進事例が紹介されているが、学術的見地から解析・評価されているとは言い難い。そこで日本医療薬学会を通じ、病院におけるチーム医療の先進的事例を収集するとともに、薬学教育6年制を踏まえて薬剤師に求められている業務について必要な調査研究を行い、薬剤師が担うチーム医療のアウトカムを評価する。

B. 研究方法

本研究は、日本医療薬学会の中にチーム医療の調査研究班を組織し、研究班を主体として平成25年度より平成27年度までの3年間に亘り実施する。平成26年度については、前年度に引き続き薬剤師の医療機関におけるチーム医療の先進的事例の収集を行った。特に、現行制度の下において薬剤師が実施することができる業務として前述の医政局長通知に挙げられた9種の業務の中から、薬剤の種類、投与量、投与方法、投与期間

等の変更や検査のオーダーについて、医師・薬剤師等により事前に作成・合意されたプロトコルに基づき、専門的知見の活用を通じて、医師等と協働して実施することについて、日本病院薬剤師会の協力を仰ぎ、全国の医療機関から事例収集を行った。

研究班では、3回の班会議を開催し、特にプロトコルに基づく薬物治療管理、PBPMにフォーカスを絞り、チーム医療によるアウトカム評価、薬剤師がチーム医療にかかわることによりどのようなアウトカムが得られるのか、医療の質の向上、安全性の改善、経済性、医療従事者の負担軽減など、科学的・客観的なアウトカム評価を試みた。その結果、6つの先進事例を選び、平成27年2月22日に開催したシンポジウムにおいてその活動を具体的に報告し、チーム医療における薬剤師の役割について総合的に考察した。

C. 研究結果

- 1) 「薬剤師が担うチーム医療と地域医療の調査とアウトカムの評価研究」シンポジウム（6-60 ページに記載）
- 2) 医政局長通知業務の実践事例収集（61-122 ページに記載）

D. 健康危険情報

特に記載すべきことなし。

E. 研究発表

特に記載すべきことなし。

F．知的財産権の出願・登録状況

特に記載すべきことなし。

1)「薬剤師が担うチーム医療と地域医療の調査とアウトカムの評価研究」シンポジウム

平成 27 年 2 月 22 日（日）に日本薬学会長井記念館長井記念ホールにおいて、研究代表者の安原真人（東京医科歯科大学）を実行委員長として、シンポジウムを開催した。

当日は、病院薬剤師、薬局薬剤師、薬学教員、行政関係者、薬学生など、全国各地から 235 名の参加者があった。

開会にあたり、実行委員長より厚生労働科学研究費補助金による本研究の経過と今回のシンポジウムの趣旨説明があった。本研究の目的は、チーム医療の進展や地域医療の拡充に向けて、薬剤師の担う役割を明確にし、求められる専門性を活かすための実践的方法論を確立することである。本年度は、チーム医療推進分担研究では、プロトコールに基づく薬物治療管理、PBPM にフォーカスを絞り、チーム医療によるアウトカム評価、薬剤師がチーム医療にかかわることによりどのようなアウトカムが得られるのか、医療の質の向上、安全性の改善、経済性、医療従事者の負担軽減など、科学的・客観的なアウトカム評価を試みた。在宅・地域医療推進分担研究班では、初年度にかかりつけ薬局機能をもった在宅医療提供薬局を推進するための新たな基準として、薬局の求められる機能とあるべき姿を報告し、本年度は、この報告の中で言及された地域包括ケアシステムの中でセルフメディケーションの推進に資する薬局のあり方に焦点を絞り、調査検討を行った。これらの

事業は次年度も継続し、薬剤師によるアウトカムのエビデンスの蓄積を図るとともに、多くの薬局や病院において実施できるサステイナブルな実践的方法論の構築に向けて、最終年度は皆様の叡智を結集したいと述べられた。

講演 1 では、神戸市立医療センター中央市民病院の橋田亨先生に「医師と薬剤師の合意に基づく処方提案とそのアウトカム」についてご講演いただいた。医師・薬剤師の合意に基づく抗血栓薬取り扱いプロトコールを作成し、病院全体のコンセンサスを得た上で日常業務に適用した例が紹介された。各種検査、周術期における抗血栓薬の取り扱いマニュアルを作成し、入院前検査センターを介したプロトコールに従った薬剤師による内服薬確認外来の運用により、プロトコール運用後 1 年間において抗血栓薬の休薬を怠ったための手術中止は 1 件もなかった。さらに、ICU 担当医師と薬剤師が協働して作成したストレス潰瘍予防薬投与基準プロトコールの導入により、臨床的に意味のある出血の頻度が有意に低下したことが報告され、プロトコールに基づく薬剤師の処方提案が医療の安全性を向上させることが具体的に示された。

講演 2 では、国立がん研究センター東病院の齊藤真一郎先生に「外来化学療法ホットライン、薬剤師外来の有用性」についてご講演いただいた。経口抗がん剤の服用患者に対して、医師の依頼により薬剤師外来

ブースにおいて薬剤師が初回服薬指導を行い、レジメン確認、併用薬剤、合併症等をチェックする。2回目以降は、医師による診察の前に薬剤師外来において薬剤師が副作用モニタリング、アドヒアランスの確認、検査値の確認等を行う。外来における薬剤師の介入により、S-1服用患者の緊急入院の件数は有意に減少し、薬剤師外来が安全性の向上に貢献し、医師の負担軽減や患者の副作用に対する理解度の向上に寄与することが示された。外来化学療法ホットラインでは、患者宅からの電話相談に薬剤師が対応することにより、医師と患者の両者にメリットがあることが示された。

講演3では、国立長寿医療研究センターの古田勝経先生に「褥瘡治療における合意されたプロトコールに基づく薬剤師介入による処方提案と創環境整備の有用性」についてご講演いただいた。褥瘡薬物療法の薬剤師介入指針を作成し、薬剤師がチーム医療へ介入する際に活用する指針としての有用性を評価することを目的として、プロトコール遵守群と非遵守群の褥瘡に対する効果を後方視的に比較検討した。その結果、薬剤師がプロトコールに基づき褥瘡治療に介入した群は有意に早期治癒しており、悪化の程度や症例数も少なく、積極的な薬剤師の介入は、非遵守群とした医師および看護師による治癒期間に比べ、治癒速度が速く、褥瘡治療の質を向上させることが示唆された。

講演4では、京都大学医学部附属病院の松原和夫先生に、「PBPMによる臨床アウトカム」についてご講演いただいた。持参薬、定期Do処方、提案・修正オーダー権限、TDMオーダー、疑義照会の一部不要、

CRCのオーダー入力、化学療法時のB型肝炎ウイルス検査オーダー、ワルファリン用量調節オーダーなど、様々なプロトコールに基づく薬物治療管理(Protocol-Based Pharmacotherapy Management)を行い、薬剤師の介入による患者の臨床的アウトカムを評価した。病棟薬剤師が持参薬処方入力に介入することにより、医師・看護師の負担が軽減し薬物療法の安全性が高まると共に、ポリファーマシーの改善など処方の適正化にも貢献できることが示された。TDMプロトコールにより薬剤師がバンコマイシンTDMオーダーに介入することにより、患者のバンコマイシン血中濃度の治療域維持率は非介入群に比べ有意に改善した。心臓血管外科におけるワルファリン指示に係るプロトコールにより薬剤師がワルファリンの内服指示に介入することにより、ワルファリンの抗凝固活性を目標治療域に維持できる割合は増加し、目標域に到達するまでに要する時間は短縮した。さらに、病院と薬局間の双方向の情報共有を目指したトレーシングレポートや検査値を印字した処方せん発行についても紹介された。

講演5では、ファルメディコ株式会社の狭間研至先生に「薬局薬剤師が取り組むチーム医療～介護施設における共同薬物治療管理～」についてご講演いただいた。モノと情報を基盤に調剤と服薬指導を中心とする従来の薬剤師業務に対し、薬理学・薬物動態学・製剤学などを基本に薬物投与後の患者状態をチェックし前回処方の妥当性を吟味すると共に次回処方への介入・提案を行う多職種協働による新しい薬剤師業務が提案された。介護付き有料老人ホームへの医師の訪問診療に薬剤師が同行し、訪問診

療のない週にも薬剤師が単独訪問し、薬剤師の居宅療養管理指導を充実させることにより、患者1人当たりの薬剤数を減少させ後発品率を上昇させると共に、患者の薬剤費を減少させ、在宅患者の入院頻度を減ずる可能性があることが示された。

講演6では、ながえ前立腺ケアクリニックの永江浩史先生に「過活動膀胱・貼付剤治療で導入した地域PBPMのアウトカム評価」についてご講演いただいた。過活動膀胱の治療に用いる抗コリン薬に対する患者の満足度は医師の判断に比し低く、服薬継続率は6ヵ月で30%未満と著しく低い現状が示された。これに対し、診療所と地域の薬局間で経皮吸収型過活動膀胱治療剤ネオキシテープ®使用時の皮膚症状を中心とする患者対応プロトコールを設定し、薬剤師による患者モニタリングや服薬指導を実施することにより、患者の治療継続率が改善し、地域かかりつけ薬局のサポートを望んだ患者の満足度が高いことが示された。

講演7では、名城大学薬学部の長谷川洋一先生に「セルフメディケーションの推進のための薬局の機能」についてご講演いただいた。研究初年度にとりまとめた報告書「薬局の求められる機能とあるべき姿」に基づき、薬局における健康情報提供や要指導医薬品・一般用医薬品の取り扱い状況等に関する実態調査結果が紹介された。現状の薬局の問題点や日本再興戦略における記載を踏まえて、健康情報拠点薬局の位置付け、考え方として、次の3点が指摘された。

- ・調剤による薬剤の提供はもとより、要指導医薬品、一般用医薬品等の適正な使用に関する助言や健康に関する相談、情報提供を積極的に行う。

- ・かかりつけ医を中心とした多職種連携の中で地域に密着した健康情報の拠点としての機能を果たす。
- ・国民の病気の予防や健康づくりに貢献している。

各講演に対して、参加者から活発な質疑や意見交換がもたれ、チーム医療や地域医療における薬剤師の担うべき役割に対する高い関心がうかがわれた。最後に、日本病院薬剤師会会長の北田光一先生から閉会挨拶があり、活気あふれる3時間半のシンポジウムを閉会した。

<プログラム>

開催日時 2015年2月22日(日) 13時00分～16時30分

会場 日本薬学会 長井記念ホール 座長

佐々木 均(長崎大学病院)

奥田 真弘(三重大学医学部附属病院)

閉会挨拶・趣旨説明

安原 真人(東京医科歯科大学)

講演1 医師と薬剤師の合意に基づく処方提案とそのアウトカム

橋田 亨(神戸市立医療センター中央市民病院)

講演2 外来化学療法ホットライン、薬剤師外来の有用性

齊藤 真一郎(国立がん研究センター東病院)

講演3 褥瘡治療における合意されたプロトコールに基づく薬剤師介入による処方提案と創環境整備の有用性

古田 勝経(国立長寿医療研究センター)

講演 4 PBPM による臨床アウトカム
松原 和夫（京都大学医学部附属病院）

座長

土屋 文人（日本病院薬剤師会）

吉山 友二（北里大学薬学部）

講演 5 薬局薬剤師が取り組むチーム医療
～介護施設における共同薬物治療管理～
狭間 研至（ファルメディコ株式会社）

講演 6 過活動膀胱・貼付剤治療で導入した地域 PBPM のアウトカム評価

永江 浩史（ながえ前立腺ケアクリニック）

講演 7 セルフメディケーションの推進のための薬局の機能

長谷川 洋一（名城大学薬学部）

閉会挨拶

北田 光一（日本病院薬剤師会）

